

パプアニューギニア独立国

— Independent State of Papua New Guinea —

...AND WE ASSERT BY VIRTUE OF THE CONSTITUTION THAT ALL POWER BELONGS TO THE PEOPLE — ACTING THROUGH THEIR ELECTED REPRESENTATIVES..



コーヒー産地の香り13

• PARLIAMENT MAY MAKE LAWS HAVING EFFECT WITHIN AND WITHOUT THE COUNTRY FOR THE PEACE ORDER AND GOOD GOVERNMENT OF PAPUA NEW GUINEA AND THE WELFARE OF THE PEOPLE •

我が国で消費されるコーヒーのほぼ一〇〇%は海外から輸入されています。したがって、私たち日本人は日々コーヒーに親しんでいるながら、農産物としてのコーヒーに接することは全くない訳です。

コーヒーとはどのような国々で、またどんな場所、どのように、どのような人々によって生産されているのでしょうか？

本誌では、代表的なコーヒーの生産地について毎号特集を組み紹介しています。

今回は南太平洋の国、パプアニューギニアです。パプアニューギニアはニューギニア島の東半分及び一万余近くにも及ぶその周辺の島々からなる国家です。

「地球最後の楽園」とも言われる熱帯山岳地帯の豊かな自然の中、古代から多くの部族が長く生活を営んでいたこの地には、近代になってからコーヒー農園が開拓されましたが、山岳地帯の多いニューギニア島高地で栽培された良質のコーヒーは、広く世界の愛飲家に知られるようになります。

我が国でもニューギニア産のコーヒーの輸入量は年間およそ4千トン（2007年度）にも及び、南太平洋では最も重要な産地となっています。では、パプアニューギニアとはどのような国なのでしょうか？

川崎邦治・文責
コーヒーブレイク編集部
三上 絹子・写真提供

太平洋民族の源流となった楽園の地：

近年、人類学と考古学の進展によって、人類（ホモ・サピエンス）現代人の起源が東アフリカにあったことが広く知られるようになりました。

七万年ほど前の氷河期には海水の広がりによって水位は低下し、現在分断されている多くの半島や諸島は大陸の中になりました。

一部の人類は長い年月を費やしなから、中東から東南アジアへ：南東へ南東へと移動し続けてゆきます。

およそ5万年前に人類はユーラシアの南、現在のインドシナ半島周辺にまで辿り着きました。

当時の東南アジア一帯は、海水位の低下によって広大な大陸を形成し、オーストラリア大陸とは僅かな距離の海峡で隔たっているだけでした。

その海峡を渡りおよそ1万年をかけて、人類はオセアニア一帯へと広がってゆきます。

この人々が、オーストラリアのアボリジニ人やパプア人、ニューギニア人の起源であると考えられています。

やがて世界の海水位が上昇し、ニューギニアはオーストラリアと分断され、

独立した大きな島となります。

多くの山岳地帯を持ち、熱帯雨林に囲まれた豊かな自然の恵みの中定住した人々は、この地で多くの部族に別れ、それぞれ独自の文化を形成してゆきます。

また、この地から北方のメラネシアやミクロネシアへと進出し、さらに北方から到達したモンゴロイドと交流しながら、海洋術を駆使して太平洋全域に広がっていった人々もいました。

日本に定住していた縄文人たちの遠い祖先もまた彼らの一部であったに違いありません。

つまり、パプア・ニューギニアは様々な太平洋民族の源流の地であると言いうことができるのです。

古来からこの地域の人々は採取生活が中心の原始社会を形成してきました。現在でも800以上の部族が独自の文化・生活様式を守り、それぞれに独自の言語を継承し続けているのです。

謎の多文化を守り続ける バリエーションに富んだ熱帯雨林

赤道とオーストラリア大陸に挟まれたニューギニア島の東半分と、ニューブリテン島、ニューアイルランド島、さら



に1万にも及ぶ島々を包括するパプアニューギニアの国土総面積は日本の1.2倍の約46万2千平方キロメートルと、太平洋最大の島国です。

しかし、人口は僅かに620万人に過ぎず、近代化の歴史は浅く、都市部以外では今もなお多くの人々が自給自足の小社会を形成し、貨幣の介在しない物々交換の生活を営んでいます。

ニューギニア島の中央部には東西に大山脈が走っており、分水嶺が形成されています。

フライ川やセピック川などの大河も多く、山地は4000メートル級の山々が連なっています。

最高峰は4694メートルのウィルヘルム山。

1年を通じて降雨量は多いものの、降雨は雨期に集中しており、短期間、短時間に集中して降るのが通常。21〜32℃と標高に応じてバリエーションに富んでいるものの、安定して温暖であると言えます。

沿岸部の低地から山岳部麓の高地、



パプアニューギニアの人々の食の中心はタロイモだったが、およそ300年前にサツマイモが伝えられると、主食は栄養価の高いサツマイモに取って代わり、以来人口が激増したと言われている。



パプアニューギニアのコーヒー生産の中心地ゴロカの農園。

つまり国土の殆どは熱帯雨林に覆われています。

多雨高温のため樹木の成育は著しく早く、高さ30メートルにも達する巨大植物が生い茂り、そこは昆虫類の宝庫でもあります。

標高の差はそのままバリエーションに富んだ様々な生態系を生み出し、森の中の豊富な自然の恵みがここに定住する人々の暮らしを支えてゆきました。

山岳地帯という地形の険しさも手伝

い、それぞれの部族は互いに干渉することなく、互いの暮らしや文化、またテリトリーを尊重しながら数万年という長い年月をかけて、それぞれの社会を創り上げ、守り続けてきたのです。

個々の部族のコミュニティは採取・狩猟を中心とした原始的な社会という意味では共通していますが、それぞれに独自の文化や言語を発達させ、その結果この国には僅か620万人の人口に対して何と800以上の言語が存在

在するのです。

800言語の内のおよそ15%はオーストロネシア言語系に属し、メラネシア、ミクロネシア、ポリネシアといった他の南太平洋の言語と共通する単語や文法を持つものですが、その他の殆どの言語は個々にどの言語系統にも属さず、単語や文法などの相互関連性は皆無と言えます。

これらの言語がどの時代にどのような発達したのかは、現在でもなお大き

な謎とされています。

西洋の歴史に登場した パプアニューギニア

独自の多文化構造が統一の方向に向かうこともなく、小さな原始社会の集合体が長年に渡り奇跡的に続いたパプアニューギニアは、もちろん歴史の舞台には全く登場することはありませんでした。

パプアニューギニアへの海外からの最初の干渉は一三世紀と記録されています。

ニューギニア島の西部海岸に渡来したのはマレー人商人たちでした。

彼らは海岸に貿易用の商業基地を造りましたが、現地の人々との積極的な交流は持たず、大きな文化的な影響は及ぼさなかったと考えられています。

1511年、ポルトガルの航海士アントニオ・アブレウがヨーロッパ人として初めてニューギニアに到達し、その後1526年に同じポルトガルの探検家ドン・メネセスが上陸して、初めてこの地を「パプア」と名付けました。

「パプア」とは、当時この地に往来していたマレー人たちの言葉で「縮れ毛」という意味で、褐色の先住民たちの頭

髪が縮れていたためと言われている。

その後の1545年、スペインの探検隊もまたこの地に辿り着きます。

探検家のオルティス・レテスは先住民がアフリカのギニアの黒人に似ていることから、この地を「ニューギニア（ヌエヴァ・ギニア）」と名付けたのです。

以来ポルトガルもスペインもニューギニア島の一部の占領を宣言しましたが、それは形だけのものでした。

1660年、いよいよ訪れた大航海時代を背景に、オランダ東インド会社が島の一部を占有します。

各国はニューギニア島を太平洋航海の中継拠点として利用しはじめますが、熱帯雨林と湿地帯がほとんどを占めるこの島にそれ以外の利用価値を求める国はありませんでした。

ただし、海岸部の低地民族の一部は、他の占領地と同じように奴隷売買や強制労働などの被害を被ることとなります。

やがて植民地主義の到来により、1828年にオランダがニューギニア島西半分の領有を宣言。

これに対し、1840年、イギリスはニューギニア島の主権を得て、この地を太平洋地域への進出の足場としま



ゴロカの農園。
手摘みによるコーヒーの収穫風景。

したが、1884年には後進のドイツがニューギニア島東部をイギリスと南北に分割する協定を結び、ニューギニアは三つに分割されることとなります。

二〇世紀を迎えると、オセアニア地域のイギリス植民地は独立し、ドイツ植民地もオーストラリアに委任統治されることとなったため、ニューギニアは西はオランダ領、東はオーストラリア領となり、現在のパプアニューギニアの形が出来上がります。

しかし、この時期を迎えてもなお宗主国は島の中央部に足を踏み入れようとはしませんでした。
つまり一六世紀から二〇世紀に至る

長い間、海外の先進国たちがこの島を往来し占領を争っている間も、山岳部に暮らす殆どのニューギニア先住民たちは、全く彼ら文明人と関わることなく、平和な原始社会を維持し続けられてきたわけです。

1926年、ニューギニア島の北海岸地帯で金が発見されると、一獲千金を夢見て多くのオーストラリア人が入植します。

1930年代に入り、彼らは海岸付近の低地で金を取り尽くしてしまうと、新たな金鉱を求め、いよいよ内陸部を探検し始めます。

ここでオーストラリア人たちが発見



1930年代から始まったニューギニア島山岳部開拓の様子。



1930年代に紹介されたニューギニア・低地部の先住民たち。



したのは、鉱山だけではありませんでした。

ニューギニアの内陸部高地の豊かな大自然、そこにも先住民が住んでいることを初めて知るのでした。

それも海岸線付近の低地部以上のおびただしい数の部族を発見することとなるのです。

こうして、ニューギニアはごく近代になつて初めて、多くの可能性を秘めた楽園の扉を開くこととなります。

パプアニューギニアの コーヒー産業の経緯

オーストラリア人による調査によつて、中央部開拓の重要性が認識されました。

金や銅、さらに原油の採掘の可能性、豊富な森林による林業の可能性、そして熱帯高地という気候条件と肥沃な土壌によるコーヒー栽培の可能性が説かれます。

さらには内陸部に暮らす先住民たちによつて労働力が確保できることも内陸開拓の重要な要素でした。

初めてコーヒーが導入されたのは1930年代のことです。

低地にはロブスタ種、高地にはアラ

ビカ種のコーヒーが試験的に栽培され始めます。

特に高地に持ち込まれたのは、栽培が難しいと言われるジャマイカ産のティピカ種で、当初から高品位のコーヒー栽培を目指していたようです。

コーヒー栽培への試みは順調に進みましたが、そのさ中、世界情勢にはにわかには暗雲が立ちこめます。

1940年、ヨーロッパでの第二次世界大戦勃発に続く翌年、日本と米英との対立による太平洋戦争が始まると、南進する日本軍の脅威に対してオーストラリアも連合軍に参加します。

結果、メラネシア地域の多くが戦場となり、特にソロモン諸島とパプアニューギニアは激戦地となつてしまします。当時はまだ政府の統制下に入っていなかった中央部の先住民たちの一部は、侵攻する日本軍側に協力し、また他の部族は連合軍側に協力し、それぞれに翻弄されながら戦禍に巻き込まれてゆきました。

悲劇的な出会いであつたにしろ、山岳部の先住民たちはこの時初めて文明人たちの影響を受け始めたのでした。

終戦後、オーストラリアの信託統治領となつたパプアニューギニアに対し、オーストラリア政府は戦争被害への直

ジャイアント・ルシーナ（にせあかしや）をシェード・ツリーにしたワウ盆地でのコーヒーの日陰栽培。



播種式で行われる苗作りの様子。



接補償を行った上で、1945年から5年間をかけて1300万ポンドを投じて、産業の開拓と農業指導に取り組みこととなります。

こうして1950年代に入り、パプアニューギニアの高地にはようやく近代的な農業が導入されることとなったのです。

山岳地帯の高地に本格的にコーヒーの植樹が開始されたのもこの時期からでした。

現在、パプアニューギニアのコーヒーの年間生産量はおよそ6万トン(2007年度・ICO調査)、その内低地栽培のロブスタ種は約10%で、残りの90%が高地栽培のアラビカ種です。

歴史こそ浅いものの、コーヒーの高地栽培に関しては当初より現地労働者の教育が行き届いており、安定した品質が保たれています。

パプアニューギニア・コーヒーの特徴と未来

前述したように、パプアニューギニアの高地で栽培されるアラビカ種は、ジャマイカのブルーマウンテンと同じティピカ種が主流です。

成育に繊細なこの豆は気候・風・土壌の三拍子が揃わなければ栽培が難しい反面、風味・香り・コクのバランスに優れており、そういう意味ではパプアニューギニアの高地は最適な栽培地でした。

こういった高品位のコーヒーの主産地は中央山脈の麓ゴロカ及びマウントハーゲンが有名で、主に標高1000〜2000メートルの高地に農園が開拓されています。

およそ4割は大規模農園ですが、その周辺には多くの小規模個人農家が点在します。

地域ごとの品質管理は、大農園小農家を問わず手摘み・水洗加工・手選別が徹底されており、こういった高品位コーヒーのほぼ全ては輸出に回され、重要な外貨獲得手段とされています。

パプアニューギニアにおけるコーヒーの苗作りは、播種式と呼ばれ、苗床に種子を直接植え付ける方法がとられています。

苗床には5センチ程の間隔で深さ1センチの溝を掘り、その中に種を1列に並べます。その上に土をかけ、さらに枯れ草を一面にかけておくと、約9週間後に発芽します。3〜4ヶ月後に

は、苗土と肥料を混合したピニールポットに移植し、約半年後、50センチほどの成長を待つて農園に植え付けられるのです。

栽培・収穫・加工に手間を惜しまず品質を保ち続けるパプアニューギニア高地産のコーヒーは世界のコーヒー市場でも高い評価を得ており、今後成長しつつあるスペシャルティコーヒー市場からも大きな期待を寄せられつつあります。

ただし、大きな問題はこの国が独立してまだ間がないことです。

1950年代以降、この地が持つ様々な可能性は現実のものとなりますが、1975年にいよいよ独立を果たし自治政府が樹立されて以降もお、かつての宗主国主導の利権構造は残存し、人々は利益の正当な配分を求め、小さな内紛が繰り返され不安定な状態が今もなお続いています。

コーヒー生産をはじめ、この国の人々を将来支える様々な新たな産業が健全に定着し成長するためには、まずは一日も早くその基盤となる国家社会としての成長と成熟が望まれているのです。